熊本県博物館ネットワークセンターだより

熊本の自然と文化

編集・発行　熊本県博物館ネットワークセンター
2022 年 3 月 10 日

No. 51

イベント情報（令和４年３月～令和４年５月）

企画展　会場：熊本県博物館ネットワークセンター　入場無料

第５回企画展
「くまもとの海岸で見られる海辺の植物」

ハマボウの標本

陸上植物にとって、海岸は生育に厳しい環境です。そのような環境に生育する海岸植物は、厳しい環境を生き抜くさまざまな形や機能をそなえています。これらの植物の形や機能、そして生き方を当センターに所蔵している植物標本や写真を用いて紹介します。

〇開催期間
令和４年３月 21 日（月）～５月 22 日（日）

ハマボウの花

ハマボウの群生地（新和町）

お知らせ

移動体験教室・講師派遣

熊本県博物館ネットワークセンターでは、学校や PTA 活動、子ども会活動などで利用できる移動体験教室、学校や教育施設等への動物・植物・地質・歴史・民俗の各分野職員の講師派遣も受け付けています。

＜移動体験教室プログラム＞
化石レプリカを作ろう・古銭レプリカを作ろう
貝殻クラフト・葉脈標本でしおりを作ろう
石臼できな粉団子づくりなど。

詳細は博物館ネットワークセンターホームページをご覧ください。

熊本県総合博物館ネットワーク・ポータルサイト

熊本県総合博物館ネットワーク・ポータルサイトでは、県内の博物館ホームページにアクセスができる「熊本県内博物館情報」、県内の博物館に収蔵されている資料が検索できる「収蔵資料検索」、おうちでできる体験プログラムなどのコンテンツが満載の「熊本どこでもミュージアム」など、県内の博物館情報が揃っています。

熊本県総合博物館ネットワーク・ポータルサイト
https://kumamoto-museum.net/

No.268
民　俗

洗濯板

洗濯板は、衣服などの布を洗うのに使う、刻み目をつけた板です。たらいの中に斜めに立て掛け、板がぐらつかないように手やおなかで押さえ、洗うものを刻み目のでこぼこ部分にこすりつけるように揉み洗いをします。

かつての洗濯はずっとかがんだ姿勢のため疲れるうえ、洗うのにも絞るのにも力がいります。また、家族全員分を洗って干すにはかなり時間がかかりますし、冬場は冷たい水でひびやあかぎれができるなど、とても大変な仕事でした。洗濯板はこのような昔の暮らしを伝える道具の代表にあげられるほど日本人にとって身近なものでしたが、実は明治時代に西洋から伝わったもので、日本で広く使われるようになったのは大正時代になってからです。それ以前は、平らな石の上などで、手で揉んだり足で踏んだりして洗っていました。板に刻み目をつけた簡単な道具ですが、洗濯板を使う方が便利だったので日本中に広まり、生活の中に溶け込んでいきました。

使用地：熊本市
使用年代：昭和 50 年頃まで

写真の洗濯板は刻み目がカーブしています。これはより洗いやすいよう改良されたものです。弧を描いている部分を下向きにすることで、石けんの泡が溝に溜まって効率よく洗うことができ、向きを逆にすることですすぎの泡切れが良くなります。ほかにも両面使えるようにしたり、石けんを置くくぼみをつけたりと、少しでも使いやすく洗濯が楽になるように工夫がなされていました。

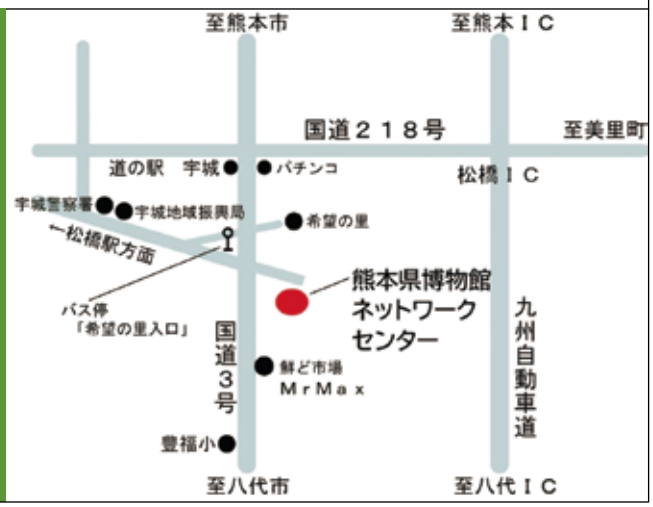
昭和 30 年代になると電気洗濯機が安価で手に入るようになります。また、電気や上下水道などの整備がすすんだこともあって、電気洗濯機は昭和 40 年には全国で普及率が 60%を超えるほど家庭に急速に普及しました。現在、毎日の洗濯を洗濯板で行うことはほとんどなくなりましたが、少量の洗濯に便利ということで、小型のプラスチック製のものなどが今でも使われ続けています。（迫田　久美子）

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869－0524　宇城市松橋町豊福 1695
TEL：0964－34－3301　　FAX：0964－34－3302
E-mail：hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP：https://kumamoto-museum.net/kmnc/

［公共交通機関］
○九州産交バス　松橋バスターミナルより宮原経由
　　八代産交行き「希望の里入口」下車
○ＪＲ　　松橋駅より約 3 km

感染症予防のためマスク着用の上、ご来館ください。また、入館時に検温、手指消毒、来館者カードへのご記入にご協力願います。



No.266 歴　史　民部省札１朱札（八代市竹田家資料）

明治政府は戊辰戦争の戦費などの経費を調達する必要があり、慶応４年（1868）に全国に通用する紙幣として太政官札を発行しました。しかし、この紙幣は額面が高額で日常生活で使用するにはとても不便なものでした。

民部省札は、そのような不便さを解消するために発行された小額紙幣です。この紙幣は、明治２年（1869）から明治３年（1870）までの間に、２分、１分、２朱、１朱の４券種が発行されました。その後は、明治４年（1871）に新たに発行された明治通宝との交換が開始され、明治９年（1876）には民部省札そのものの通用及び交換が停止となり、明治12年（1879）までに回収が完了しました。

図１　民部省札
１朱札表

図２　民部省札
１朱札裏

民部省札は全券が同じ図柄であり、本資料の図柄（図１・２）をみると、表は額面の周囲が菊章と桐章及び瑞雲で縁取られ、その下に珠を掲げる双龍が描かれています。また裏は、「明治己巳発行」の上部に羽を垂らした鳳凰、下部には桐と龍馬を配置するなど太政官札と同様に天皇や御新政を連想させる図柄が多く採用されています。このような図柄は、この時期に発行された紙幣の特徴といえます。（堤　将太）

No.267 地　学　白雲母とザクロ石を含む花こう岩

山鹿市鹿北町の岳間渓谷には、花こう岩が分布しています。一帯を東から西に流れる岩野川の川岸や金原の滝には花こう岩の岩盤が露出しています。

花こう岩とは、主に石英、長石（カリ長石、斜長石）、黒雲母という鉱物からなる岩石で、カリ長石が多いのが特徴です。鉱物は肉眼で見える大きさで、等粒状組織という同じくらいの大きさの粒が集まった構造をしています。地下深くにあったマグマだまりが、ゆっくり時間をかけて固まってできた岩石です。

図１　岳間渓谷の花こう岩

図１は岳間渓谷で採取した花こう岩です。黒い鉱物がちりばめられていますが、全体的に白っぽい岩石です。接写した写真を見てみましょう（図２）。透明な鉱物は石英、白い鉱物は長石（カリ長石、斜長石）です。この花こう岩のカリ長石と斜長石は、どちらも白いので、肉眼での区別が困難です。黒い鉱物は黒雲母で、薄くはがれやすい性質があります。銀色に光る白い鉱物は白雲母で、黒雲母と同様、薄くはがれやすい性質があります。さらに、丸く小さな淡紅色のザクロ石も見られます。

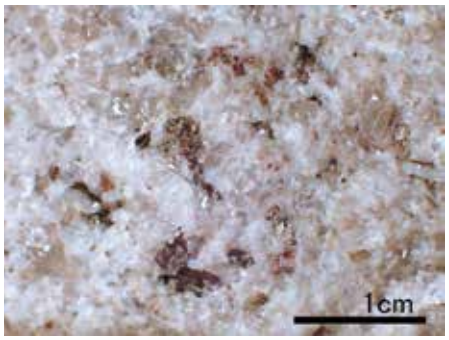


図２　花こう岩を拡大して見たようす

白雲母やザクロ石を含むのは、岳間渓谷一帯の花こう岩の特徴です。川岸だけでなく、遊歩道や道路沿いでも白雲母やザクロ石の入った花こう岩を観察できます。（廣田　志乃）

No.264 動　物　ナマズ　*Silurus asotus*（ナマズ科）

ナマズ（図１・２）は、国内では北海道南西部から九州にかけての川や水路、池沼などに生息する淡水魚です。本種は古くから言い伝えや絵画などに登場したり、キャラクターに用いられたりして、人々に親しまれてきました。実物を見たことがなくても、おそらくほとんどの人が、黒っぽくてぬるっとした体、大きな口、細長いひげを持った大型の魚をイメージすることでしょう。これほどまでに名前が浸透している生物も珍しいかもしれません。

本種はとても貪食（どんしょく）で、その大きな口に入る獲物を何でもひと飲みにしてしまい、淡水域の生態系において高次の消費者に位置づけられています。小型の魚類やエビ・カニ類、時には水面を泳いでいるネズミ類や小さなカメ類を食べることもあるようです。

図１の標本は、宇城市の農業用水路において採集されたものです。熊本県内では３月頃から、浅い水路や水田に多数のナマズが繁殖のために集まる様子を見るようになりますが、この光景を目にするたび、春の到来を感じるとともに、日本の里山で繰り返されてきた命の営みに思いを馳せずにはいられなくなります。

（中薗　洋行）

図１　ナマズ標本（宇城市産）

図２　ナマズ生態写真（宇土市）

No.265 植　物　ウマノスズクサ *Aristolochia debilis*（ウマノスズクサ科）

ウマノスズクサは、草地や道端などに生育する多年生のつる植物です（図１）。このちょっと変わった和名は、果実の形が馬につける鈴に似ていることに由来しますが、日本国内では結実するものは少ないようです。花の形も変わっています。花被（かひ）（花弁・がく）は合着して筒状の花筒（かとう）になっています。花筒は、根元では丸く膨らみ、中部は管状に細くなり、上部は外側に広がっています（図２）。広がった縁は一か所だけが長く伸びます（図３）。また、この植物はアリストロキア酸という有毒な物質を含んでいます。この物質は、ヒトが多量に摂取した場合、腎臓の機能に障害をおよぼします。ウマノスズクサを食草とするジャコウアゲハの幼虫は、アリストロキア酸の毒性に耐えるだけでなく、体に蓄積することで外敵から身を守るのに利用しているといわれています。

図２の標本は 1974 年に熊本大学の構内で採集され、熊本大学理学部の標本室で保管されていたものです。熊本大学理学部で蓄積されていた標本の多くは、現在は当センターに移されて整理・保管され、研究や教育普及活動に活用されています。このウマノスズクサの標本も、そのような歴史と価値を持つ大切な標本の一つです。（前田　哲弥）

図１　ウマノスズクサ（江津湖）

図２　ウマノスズクサの標本。矢印は花。

図３　ウマノスズクサの花。一か所が長く伸びる（矢印）。